



## 詩 壇

財 前 義 見

### 審 判

朔風を呼ぶ助の饗宴

陰影<sup>かげ</sup>なき鎖條に悶絶する悲劇の祝祭

遠く掌の北方へ縫ふ 白い秋の空溝に霧のやうに蝕んだ微哭の呪文をこぼすミイラの經歷

相尅の堡壘 堡壘の牙林に轉倒する宿命の意欲 起ち上り明日の疑惑を索裂し渴望する双眸に 眉<sup>まゆ</sup>を焦く月魄の眩暈の段階に剝落するニヒルの假面

斷層の審判！ 星かけ絶えた獄窓で 海に忘却<sup>ワスレ</sup>た記録に索る孤愁の桂冠の坐に あゝ母の胸壁に瀾漫する夕焼の祈

禱よ

不具<sup>カタヘ</sup>の占星師の手に翳す世紀の審判の髑髏旗の下を、あゝ、恩愛の羈絆を絶つていちろ背離<sup>タリニ</sup>の水溪<sup>ミヅノ</sup>を攀る

## 記 憶

星の殞<sup>ツ</sup>り交ふ空の階段で

白い肢體が撒亂する星座の秘密

白い山頂の天文臺　その上の螺<sup>ネジ</sup>れた貝は回想症　遙かな距離に當惑する望遠鏡の涯<sup>メ</sup>ての潜航艇<sup>サブマリン</sup>

學者の白い頭腦<sup>ヘッド</sup>の中で

はるかな三角洲<sup>デルタ</sup>に散在する化石の符號

白い洋燈<sup>ランソ</sup>にこぼれちる白い祝祭の哀愁譜　白い海塔に旋回する鷗の翼に墜ちて來る仄かな夢の白い觸手　海に展開<sup>ヒキラ</sup>け

た四角な窓で　白い少女のバラピン紙の髪に・故園の白い雲を聽く

仙人掌<sup>サボテン</sup>の上を吹く王妃の憂愁　沙漠の晝月<sup>ツキ</sup>に濡れひゞく幽<sup>カス</sup>かな海嘯は　遙かな距離へのノスタルジャ　ほくは記憶

の木靴<sup>サボウ</sup>を穿いて　白いパイプを散步する